

平成三十一年四月一日発行
通巻一三六号(毎月一回一日発行)

京鹿子



4月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その四十三



緋袴の黒髪跳ねる寒の明け
寒明けるぬた場のひかる獣道
方寸の陽へ淡き恋ふきのたう
唐傘に浮かせる化粧春の雪
春の宵屋烏誘ふ潜り門
孕み鹿点呼に戻す現かな

流木やひとり雪虫追うてゐる
ゆきやなぎ百の尻尾の太郎冠者
嫁ぐ家にひとつの空や山ざくら
巽橋越ゆ初蝶の芸祈願
木履や芽吹き之音の磬
鴨東の芽組みの空や北座句座
春ともし紅引かぬ身のかんざし屋
木の芽晴甘味処のスイーツ連れ

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



阿 国 の 碑

望 郷 や 柳 が く れ の 阿 国 の 碑
時 に つ く 北 座 の 残 す 春 と も し
天 平 の 一 つ 灯 映 す 立 雛

— 追 懐 —

亀 鳴 く や 血 気 ば か り の 隊 士 の 死 (平 成 十 三 年 作)
竹 林 に 羅 漢 の 嗤 ひ 春 隣 (〃)

—
近 詠
—

和田 照海

七癖

買 初 や ま づ は 瞬 間 接 着 剤

蝨 人 に 仕 来 り き び し 弓 始

鬼 や ら ふ 遠 海 鳴 り の 頻 り な り

七 癖 の 一 つ や ふ た つ 鬼 の 豆

春 耕 の 行 き て は 返 す 男 か な



松本 鷹根



寡 黙

山焼きを終へて寡黙に酌み交はす

鈴の緒に凍蝶すがる陽を給ふ

杉は秀に松は容姿に雪を待つ

針供養比良眩しみて妣慕ふ

肩を組む山の春雪句座を祝ぐ

近 詠

塩貝 朱千

天 狼

平成のあをあをを香るなづな粥

むかし話の絵本抜けでし寒満月

寒林や夜ごと天狼捧げぬし

白髪のを追ひゆけば梅にほふ

寒鴉二羽ニユートンの林檎の木

英華採集

捨て切れぬ字余りのあり去年今年

福知山 松山潤子

多くの人が作句する上で定型を考えて推敲を繰り返しているものと思われるが、どう考えようが上手く纏まらないことが多々あるものである。その時は、字余りを承知の上で後は読み手に委ねることになる。掲句の場合、季語を「去年今年」と置いたことによつて今年一年の作者の回顧へと変わる。割りの合わない、理屈で通らない諸々の出来事も切り捨ててしまえば済むものの現身にとつては切るに切れないものである。

綿虫よ終身保険説く行員

東京 大政睦子

会社勤めをしていた頃、生命保険会社のセールスレディーの人達は社内での出入り自由で新入社員の勧誘に入れ替わり立ち代わり押し寄せて来たのを思い出す。昨今は、高齢者向きの保険も種々あるようで熱心に終身保険を勧めている行員を詠んでいるが聞かされている作者には、ややうんざり感が漂っているようである。上五の「綿虫よ」の呼び掛けの形に作者の思いが十分に託されており俳味がある。

石庭に一切の無駄なき淑気

草津 倉橋あつ子

京都の神社仏閣には有名な石庭が多くあるが、龍安寺の石庭を思い出す。この石庭には、色々と謎が取り沙汰されているが十五個配置されている謎が一番面白い。即ち、どの角度から眺めても十五個の一つが見えないように造られていて世の中には完全なものなどは存在しないであろう、という訓えである。ところが、新年の季語である「淑気」と取り合わせると神がかりとなり一切の無駄がなくなるという見立ては実に面白い。

神麓集

春の風邪 藤岡紫水

公魚の釣舟並ぶ逆さ富士
笹跳ねて跳ねて雪解の風渉る
刻ゆるむ春先の午后風邪心地
初午の面から覗く胡乱の世
早春の一光芒に母郷あり

夏 蝶 沼田巴字

緑陰や人透き通り歩きをり
夏草や人に七難八苦あり
訪れを老いといふのか新茶汲む
古茶いれて別れし人を思ひをり
夏蝶や利休の高きこころざし

白 椿 丸井巴水

神鶏の一鳴きありて年明くる
混浴を仕切る溶岩初湯影
雪山の麓に灯るジビエ店
冬眠の寝返りありて磐なだれ
白椿落つる真際のひとしづく

梅 三分 植村蘇星

ホ句に生き生かされ米寿梅三分
詩心絵ごころ誘ふ梅三分
草稿を終へし窓越し梅三分
草稿の終り一息春日向
春隣吾に晩年無かりけり

神麓集

生も死も 北川孝子

春の東風ま向かへば湧く底ぢから
なほ生くる^{よわい}齡愛しみ年迎ふ
永生きに賜はる余慶新春そこに
生も死もただの一文字春めぐる
春迎ふ床屋で襟足切り揃へ

犬の目 直江裕子

思ひきり山茶花飛んではみたものの
何か手に持たねばさみし十二月
もう既に極月の端踏んでゐる
中空に残された柿が痛い
犬の目が疑つてゐる師走かな

青竹 高木晶子

茎立や私の鍵軽く開く
ぼたん雪一人称に降りつのる
節分の祝詞人間(じんかん)すり抜ける
青竹で酌む節分の力酒
立春の天地をつなぐ雨の音

知り尽し 伊藤希眸

立春寒波明日あることを知り尽し
戦あるな緋の寒牡丹菰を出す
雪原や銀河の流る音を聴く
曲り来て角に薄氷足捕らる
水仙の吹かれつばなし郵便来る

神麓集

水晶体 奥田筆子

寒の雨水晶体に朝来たり
染み寒し一皮むきしまなこかな
大寒の鏡にゆらり難波船
綿虫の重力思ふころぶなよ
前言を翻したり衣被

ずつと冬 井上菜摘子

各駅停車ていねいに冬枯れてをり
越冬のしじみ蝶いつさいをたたみ
懐手まづ逆効果考へる
ももいろの昭和の財布ずつと冬
調弦やとほく漁り火がきれい

手鞠唄 村田あを衣

絵屏風の仙人歩き出す濁世
手鞠唄十の続きは遠山河
女正月身より解きたるしつけ糸
寒明ける二枚で足りぬ一筆箋
京紅をかうて祇園の春の宵





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

城陽 鷺山 珀眉

野火煽る許容範囲を超えてくる

足し算の答まぎれなきものの芽

白梅の白の研ぎだす五感かな

寒雷の一喝迷ひなかりけり

ウツフンとうごくドアマミラー春隣

何事もなかつたやうに初鏡

初句会晩年といふ旅はつむ

水鳥の声平成を惜しみつつ

寒晴れの空よりすつと糸を抜く

白息を無駄使ひしてよく笑ふ

地球てふ方舟初陽うすうすと

不器用の元を辿れば独楽廻し

大三輪へ朝の一礼歛始め

皮手袋嵌めて世間に身構へる

人生の余祿のやうに冬至の陽

百均に百の電飾聖夜待つ

さざんくわの白に重ねる追慕の歩

食べ尽くし白波の立つ河豚の皿

深呼吸して空色の日記買ふ

雪をんなよりの伝言母が来る

京都 井尻 妙子

京都 片山 熙子

風の扉を押しして枯野へ深入りす
福 山 亀井 福恵

大いなる伸び代を秘め冬木の芽
冬帽子昭和は古びゆくばかり

数へ日といふ瀬戸際に立つてをり

十方に冬芽ととのひ受難の碑

一系の靴の押しあふ二日かな
福 知 山 西村 滋子

初山河胸裡しづかに流れゆく

歳旦や地球は一つ舵を切る

きらきらと初恋語る女正月

臘梅の散つて八十路の厚化粧

初詣地球は廻る自我自尊
哀 都 菊池 和子

初風呂やわたしの隙を見せてやる

身中の蛇口全開大旦

読みかけも句作途中も年始め

何ひとつこだはりのなき御節皿

寒梅一りん記憶の筥へ閉ぢこめる
高 槻 安田 優歌

妖精のくすぐる舌や寒いちご

寒月や読み解きたりモーゼの書

冬薔薇の真紅の吐息聞かし

葱きざむ俎己が歳月よ



捨て切れぬ字余りのあり去年今年
福 知 山 松山 潤子

新年や空より溶ける海の色

重ねゆく月日真直に大冬木

父といふ一本の糸冬の星

綿虫よ終身保険説く行員
東 京 大政 睦子

マスクの目マスクに笑ふ古本屋

補修したき思ひ出ふたつ冬薔薇

初日影平成の淵清らなり

石庭に一切の無駄なき淑気
草 津 倉橋あつ子

年の市露地の奥なる占師

五百段一步踏み出す年始め

縄文も弥生も遠し年つまる

嫁が君一茶をかじる風流人
ア リ ソ ナ 伊吹 之博

骨正月車座となる我が系譜

七草粥ベジタリアンの箸使ひ

使はねど初孫の名や祝箸